

12  
566

進呈

北海道論 第壹

(非賣品)

北海道狂生稿



# 北海道論目次

## 第壹 緒言

### 第貳 北海道の改革を論ず

○ 行政上改革論

○ 商業上改革論

○ 農業上改革論

○ 漁業上改革論

### 第參 全世界に對する北海道の位置を論ず

○ 日本に於ける北海道の位置

○ 東洋に於ける北海道の位置

○ 歐洲に對する北海道の位置

○ 米國に對する北海道の位置

## 第四 結論

# 北海道論

北海道狂生稿

## 第壹 緒言

嗚呼我が北海道は日本に於て果して如何なる位置を有するか、東洋に於て果して如何なる位置を有するか、抑も又歐洲及び米國に對して果して如何なる位置に立てるか、

嗚呼我が北海道の實況は全果して如何、商業は如何、農業は如何、漁業は如何、行政は如何、抑も又他方般の事項は果して如何なる道程に彷徨しつゝあるか、

嗚呼我が北海道の實況は全果して如何、商業は如何、農業は如何、漁業は如何、行政は如何、抑も又他方般の事項は果して如何なる道程に彷徨しつゝあるか、

嗚呼我が北海道の實況は全果して如何、商業は如何、農業は如何、漁業は如何、行政は如何、抑も又他方般の事項は果して如何なる道程に彷徨しつゝあるか、

嗚呼我が北海道の實況は全果して如何、商業は如何、農業は如何、漁業は如何、行政は如何、抑も又他方般の事項は果して如何なる道程に彷徨しつゝあるか、

嗚呼我が北海道の實況は全果して如何、商業は如何、農業は如何、漁業は如何、行政は如何、抑も又他方般の事項は果して如何なる道程に彷徨しつゝあるか、





余は今北海道を論せんとするに當り、之れを二篇に區分し先づ最初に、北海道の急須改革すべき必要を説き、徐ろに進んで全世界に於ける北海道の位置を論せんと欲す、是れ北海道が其万般に於て斷然たる改革を執行し、これをして非常に長足の進歩を爲さしむるにあらざれば、彼れが全世界に對して有する所の位置に耻ぢざるの國たる能はざればなり、若し夫れ、余が立論にして一見順序を顛倒せしかの如く思ふの士は、宜くし本篇を通讀して始めて疑團の氷解する所あるべし、乞ふ諒せよ、

## 第貳 北海道改革論

抑も我が北海道は今如何の景況なるか、其外觀的、否事ろ局部限定の數ヶ所に至りては、實に隆々昌々目を眩するが如きものありと雖も、深く其内地に浸入して廣漠たる原野、鬱蒼たる森林、進んで之を開拓せんとするもの少く、よし之を開墾しつゝあるものあるも、遅々濫々見るに足らず、此天然の富瘠をして顧盼するもの希れに、自然の成行に放任するが如きの實況を目撃し、或は至る處の野桑、喬々茂生するも此餘利を拾収せんとするものなく、或は至る處の鑛山、至る處の魚藻、昌んに之を堀取し、盛んに之を漁獲するものあり、是れ又一部局定の個所に限り、遠洋の如き更に手を伸ばすものなく、又其極北千島の

如きに至つては天然の鑛物は徒らに寒地の土と化せしめ、海上の富財亦空しく赤髯奴の爲めに攫取し去られ、又は沿岸砂礫堆きの處に腐敗し去らしむるが如き、實に看過するに忍びざるものあるを見るに至りては、如何の無感覺者たりと雖も、之れに手を下さんとを思はざる者あらざるなり、要之北海道は内地に比し、天然の富貨尤も多く、就中鑛物は全土を蔽ひ、魚藻は周囲を回繞し、特に土壤肥沃眞に天府の名に耻ぢざるものたり、然るに社會の人士多くは因循姑息、此天府の遺利を見ずして自然に放棄するが如きに至りては、余輩の尤も憤慨に堪へざる所、見よ彼が衰々たる土壤は高低一帯、翠雜を飾り無量の財貨を擁して諸君が移住を迎ふるにわらずや、又見よ彼の潺々たる海波は万里一襟、琴瑟を弄し無算の寶庫を供して諸君が遠征を慰むるにわらずや、嗚呼我が親愛なる同胞諸君、徒らに父兄の財産を享け、安然無爲一生を空過するは決して人の本務にあらざるなり、若し夫れ諸君にして心を此地に注ぎ、移住以て事業を起さんと欲せば、余は不肖を顧みず、余が本年探檢したる事實に付き、探掘すべきの鑛山、拾収すべきの鑛物、創起すべきの工業、探漁すべきの魚藻及び開拓すべきの土地にして、牧畜に適するもの、農作に適するもの、園藝に適するもの、只諸君の擇ぶ所に任して諸君の案内者たらん、乞ふ些しく奮起する所あり



らんとぞ、

北海道に於ける未開此の如く夫れ甚だし、嘗に之れのみならず、其社會の幼稚なる更に一驚を喫すべきものあり、若し夫れ今の時に當り急劇之れか改革を踐行せず、之を今日に放任せんか、國家の大患之れより大なる者なけん、嗚呼此優勝劣敗、弱肉強食の時代に當り一朝外國と隙を開きて疾雷更に耳を敵ふに違わらざるの曉に際し、如何なる手段を以てか此天府を保護せんとするか、現今屯田兵のあるありと雖も、甚だ少數にして勁敵に抗すべくもあらず、特に軍港と稱すべきものなく、海軍に向つての守備皆無と云ふも決して過言にあらざるなり、政府亦茲に見る所あり、本年北海道に常備師團を置くの議ありしと聞く、之れ大によし、然れども未だ以て滿全の策となすに足らず、宜しく之れが改革を執行し、勉めて迅速に開拓を圖り、須らく我本土と同一の地位に至らしめざるべからず、ことし我國清國と戦端を開くや、官民一致、愛國の衷情、二なきとを表彰せり、此心情より推究し來り、又我國民が諸外強國に對するの敵愾心より想及し來るときは、誰れか些の費用を吝み、少の困苦を恐れて此急務を怠らんとするものやある、官宜しく北海道の行政を改革すべし、民宜しく其實業を改革すべし、官行政を改革するも民實業を改革せず、民實業を改

○官行政を改革せざれば、是れ不具の改革にして到底良全の結果を望むべからず、却つて禍根を千載に貽すかの虞あり、之れ恰も車の兩輪と鳥の双翼とに於けるが如く兩々相對して決して離反すべからざるものなり、乞ふ少しく之を論ぜん

#### ○行政上改革論

余は今北海道の改革を論ずるに當り、予が立論の順序として先づ第一着に同道に於ける行政上改革すべき要点を指摘して大に社會の注意を乞はんと欲す、

抑も北道に於ける行政上の事、改革を要するもの一二にして足らず、然れども先づ其區域の点より論ぜんか、現時の長官北垣國道君本春三月屬官を率ひて東都に上り、今尙晏然として同地にあり、北海道の改革上東都に於て要を辨するもの多きに依ると聞く、夫れ或は然らん、然れども此大國を管するもの、長官其人にして身を他地に置き、一年己れが統ぶる處の應衝に出でざるもの果して何たる行爲や、東都に於て要を辨するものありとせば宜しく支應を置て之を掌らしめ、本廳と共に氣脈相通じて以て百般の進捗を圖らざるべからず、然るに擧茲に出でず、泰然轄土を顧みずして他郷に在るが如きは、吾人の尤も取らざる所、余は實に長官其人の爲に惜み、北海道の爲に惜み又國家の爲めに惜まざるべか



らず、此の如くにして如何にして同道の進歩を望むとを得べき、嗚呼北海道の地、長二千石を得ざるや久し、否之を得ざるにわらず、管轄餘り廣大に過ぎ、事々物々、到底一々之が發達を圖るを得ざるなり、此の如くにして同道の進歩を希ふもの、眞に黄河の清澄を待つと一般、幾年更に改全を見るべからざるなり、若し夫れ今の時に當り斷行一番、渡島、後志、石狩、日高、膽振の五ヶ國を管するものを札幌又は函館に設置し、天鹽、十勝、釧路、北見、根室の五ヶ國を管するものを、釧路又は根室に設置して以て其監督を掌らしめ、我々屬々兩々相對して其改革と進歩とを圖らしめば幾年ならずして、東洋唯一の獨立國たる我が日本帝國が北門の鎖鑰たるに耻ぢざるの地たるに至らんか、只夫れ本土の如く一國一縣を置くが如きは未だ後日の事たりと雖も、其郡衙の配爵の如きに至りても亦大に改革を要すべきものにして足らず、一々之を論ぜんが、繁雜數千万言に涉り、一管の筆、一片の紙到底之を盡す能はざるのみならず、畢竟一時に之を改革せんとするも、眞に之れ言ふべしとして行ふべからざるもの、余輩亦之を後日に譲り單に急須改革を要すべしと認むるもの一二を擧げんか、石狩は今全國一衙の下にあり、之を分つて二となし一をして札幌、原田、滝益、樺戸、夕張、空知の六郡を管せしめ、一をして上川、雨龍の二郡と天鹽の上川を

加へて三郡を管せしめ、十勝一國は今釧路全國と共に一衙の下に在るもの之を分つて二となし、一をして釧路一國を轄せしめ、一をして十勝一國を管せしめ、千島三十三島、五郡中擇捉を除き他の四郡の根室全國と共に一衙の下に在るもの之を割へて根室一國のみを管せしめ、擇捉島の郡衙を廢し、其他色丹、國後、新知、占守の四郡と共に正極北三十三島を統督する處の有爲の島司を擇捉に置くべし、其他細事の改革すべきもの多しと雖も、此一時急劇の改革は事實上到底之を行ふべからざるのみならず、徒らに勞して功なきが如きものあるを免れず、故に漸を以て進み、愈々進むに従つて愈々改革を施さば、遂に北海道をして文明國たる日本の版圖たるに耻ぢざるに至らしむるの一大原由たらんか、

之を要するに北海道は今未開に屬す、故に大と小とを問はず、其所轄皆非常に廣漠に過ぎ爲めに大に其進歩を阻隔するものあり今、其一例を示さんか、十勝の如き其人口の稀薄なる一方里に付き三人弱、實に極北の寒國千島の下にあり、其廣袤百數十方里に亘れるの十勝原野の如き、襄々たる原野、茂葱森林、共に未だ其測量をさへ了せざるにわらずや、是れ實に同道の爲に取らざる所、經費の如何に關せず、北海道の爲に計らんとするもの宜しく可成的、其管轄を狭め以て普ねく之が進歩を圖らしめざるべからず、若し夫れ當時百般



生産業の上に施せる所の行政の良否に至りては、其商工の上に於けると其農漁の上に於けるとを問はず、改良を用ゆべきもの眞に汗牛充棟も嘗ならざるものありと雖も暫く之を他日に譲り再び徐ろに論ずる所あらんと欲す、

### ○商業上改革論

余は論鋒更に一步を進めて、是れより實業上改革すべき要点を摘記すべし、然るに實業上の事、該博亂雜、一々之を論述し去らんとするときは、事支末に流れ遂に其眼目を失ふの恐れなしとせず、特に詳細之を論述するに當ては其項目多く、能く一朝一夕の盡すべき處にあらざるを以て、余は只其大体に就きて一二を論述するととなし、先づ商業上より筆を起すべし、

抑も現時北海道に於ける商業の状体は、大に改良を施さるべきもの多し、然れども今其中に就き尤も急遽改革を要すべしと認定する處の一二を列舉せんか、(一) 各種日用品を售る所の商賈が徒らに多くの利益を貪りて高價に賣らんとすると、(二) 各旅舎に於ても亦度外の収益を得んとするが爲めに其宿費の非常に不廉なると、(三) 或る一地方を除き其他凡て錢以下に係る少額の取引は斷じて之を拒絶するの習慣あると等なりとす、これ等の事

實は如何に移住民を妨ぐるか、如何に北海道の進歩を阻くるか、慢然無神經を以て一看し去らんか、更に此事實を認むる能はずと雖も些しく眼力あるもの、細かに其内情を看破するに至りては、雖れか北海道現時の爲めに長大嘆息せざるものやある、此らの事實、眞に是れ社會の移住心と、北地の進歩とを阻隔するの大原因たり、日用品高く、旅費廉ならず、錢以下の小取引は斷然之を拒むの風あるを以て、少資力の移住者は皆其日用失費の多きに恐れ、其目的の事業を抛擲するに至るのみならず、遂に之に耐へ得ずして流離困頓、空しく郷里に歸るもの比々皆然り、夫れ然り、然りと雖も是れらの事實皆これ人々各個の自由に屬し、特に社會進化の軌道上、免るべからざるものにして、自然の成行以外、如何ともする能はざるか、將た又之れ到底人力の左右し得べからざるものとせんか、吾人又何をか云はん、然れども社會何者乎爲さんと欲して成らざるものやある、今日北海道の爲めに思ひ、我帝國の爲に圖るもの宜しく之が改良の途を講ぜざるべからず、これを改良する如何の方法に依るべきか、是れ一見甚だ難事の如なりと雖も決して行ひ難きものにと非らず、只是等の當事者自身が北門の鎖鑰をして普ねく開明の域に進ましめ、以て一朝有事の日更に願勝を勞せざらしむるに至らしむるの事、實に今日の急務にして決して國民たるもの、



一日も忽諸に附すべからざるものたるを感ぜば足れり、同道今日の状況を以て推論するときは、人民只私利を考へ、私慾是れ營み、更に國家を憂ひて遠大の計をなすものあらざるの結果、遂に此の如きに至りたるものと断定するを得べし、嗚呼我が最愛なる北地の商賈諸士よ、諸士が日清開戦に對するの感想は果して如何なりしか、諸士は愛國心の一点に於て毫も他に譲る所なきを誇稱せしにわらずや、此感想より推究し來り、亦此門閥をして迅速に鞏固ならしめんとするの愛國心より波想し來るときは、宜しく共力一致之が改良を斷行して以て各種移住者の利益を圖らざるべからず、以て普ねく社會人士の移住心を奨励せざるべからず、諸士が此種に於ける斷乎たるの改革は其結果として、一は北海道が非常なる長足の進歩を助勢し、よも万一の事變に遭遇する事あるも更に他の力を假らず、自防自衛する事を得るに至らしめ、一は諸士が最初失ふ所甚だ少くして終末得る處甚だ多きに至らしむるものなることを考へ、是れ真に一舉兩得の策にして、大は以て國を衛り小は以て自身を守るの計たり、若し諸士にして些も念頭より之を脱却せしめず、諸士が常日揚言するが如く、少しも帝國臣民たるの行爲に耻ぢざらんと欲せば、急劇先づ之れが改革を決行せよ、是れ寔に余一個の願望にあらず、苟も國を愛し、民を愛するもの、舉て諸士

に望まんと欲する所の者たり、乞ふ今より刮目して諸君が爲す所を見ん、只夫れ直接に各移住者に關係を及ぼさざるの事項に至りては、尙論すべきもの多しと雖も、今は今急論するの必要を見ず、須らく他日を待つて細論する所あるべし、

### ○農業上改革論

農業上の改良を要し、改革を施すべきもの亦甚だ夥なからず、然れども是れ又多岐、巨細に之を論述せんか、到底有限の紙數を以て之を了すべからず、故に余は其大体に付き一二を論述すべし、

嗚呼此天府に於ける其裏々たる原野は如何に拓植され居るか、又其蒼々たる山林は如何に開墾され居るか、抑も又開拓されたるの圃畝が如何なる種類の生産物を以て充され居るか、是れ素より地味の如何、氣候の如何によるもの多かるべしと雖も、自ら同道の内地を涉獵し、狎しく現時の實況を目撃するときには轉た浩歎に堪へざるものあるのみならず、眞に一驚を喚すべきものあり、既に貸下を得たるの土地にして其の期間の満了せんとするの今日に當り未だ一個の鋤鍬を加へたるの跡なきものあり、或は貸下を得てより數十年を経過しかるの今日に於て僅かに其四分の一乃至五分の一を開墾したるのみものあり、此の如



くにして種々の手數と費用とを要して漸く貸下を得たるの土地をして空しく政府に返上するもの比々皆然り、是れ畢竟各移住者が一ばら農耕に従事すべきの決心を以て渡航し先づ政府に向つて貸下を請求するも、農業の収得遅々たるが爲めに資力なきもの其間の糊口を凌ぐ能はず、只目前の少利に着眼し、汲々として漁業又は其他の事業に被雇者たるもの多きが如き其一大原因たらんばならず、且つや其功を較べたるの畑圃に向つて蒔育する所の種類は果して如何、徒らに馬鈴薯、黍、野菜等極めて劣等なる品類大部分を占め、米、豆、麥等に至りては實に僅々見るに足らざるものあり、論客の或者は曰く、是れらの事に至つては地味の如何、水利の如何、氣候の如何に據るものにして到底人力の以て彼此し得べからざるもの、其自然の地味と水利と及び氣候の如何とに適應するの生産物を施さざるべからざるなりと、是れ實に普通見易きの議論にして更に間然する所あらざるが如し、然れども是れ其現況を知らざるもの言たり、現に本年の如き同道中最寒地の一に加へらる所の十勝に於て米作の試験をなすものあり、而も好成績を得たるにあらずや、然るに當時の現状たる水利あるものにして徒らに水田と爲さるのみならず、又此狀勢より推想し來るときは米作は到底氣候上北海道の一部を除きて他に適するの地なきものと斷定したるの結

果に外ならず、其他の高華種類に於ける亦然り、徒らに「喰はず嫌ひ」とも稱すべき所の感念を抱へて遂に今日の如き惡慣習を作爲せしに外ならざるなり、嗚呼何ぞ夫れ迂濶なるの甚だしきや、宜しく進んで水利の便あるものは速に稻田となし、其他水利なき所と雖も陸稻其他高等なる植物を育成して、以て其全般に於ける改良を施さるべからず、是れ實に其收穫に於て非常の利益を見るは余か言を待ざるのみならず、大に移住者の從農心を煥發すべきなり、只之れ等の事に至つては別に禿筆を呵して責むべきものにあらず、各々自身か從來より多額の秋收を得んと欲せば可なり、乞ふ「喰はず嫌ひ」の感念を一洗して斷々たる所量に出でんとを、

然り而して各移住者が從來其土地に施しつゝある所の農法は如何、是れ大に改良を行はざるべからざるものあり、大農法の小農法に比して割合に利益多きは素より余か論を俟たず、而して北海道の土地、渺々漠々大農法を用ゆべきもの多く首尾殆んど相接す、而も全く之に則るもの少なく、間々之れに依りて盛んに農業に従事するものあるも、ろは實に僅少、皆に曉天の辰星のみならざるなり、徒らに小農法に依り或は之れより一層不規律なる方法を以て孜々耕作をなし、或は貸下の許可を得たるものより再び借り受けて僅々百歩乃至



二三百歩の土地を數年を経過して尙其工を成さざるが如き、規模殆んど極小なるもの其大部を占むるにわらずや、然れども此事たる到底少資力者の能く爲すべからざるものなりとして放任すべきか、將又よし之を放任すると假定するも、今後數十百年の後同道が開明の域に達したるの時に至らば原野森林餘す處なく、開拓し盡さるべしとなして之を放抛せんか、是れ實に無責任も亦甚だしきの議論と云はざるべからず、尙も國を憂ふもの誰れか斯の如き議論を爲すものやある、一人の力能く爲し能はざるも十人の力之を爲し、十人の力之を爲し能はざるも百人の力能く之を成す、今日北海道に於ける農業の状態、徴々として振はざる、其因とする處實に小資力の者が團結従農を企てず、獨力以て事に當るもの多きに基せずんばわらず、政府は宜しく事情を酌量して適應の保護を與ふべし、移住者は宜しく一致團結して實力を集め以て開拓に従事すべく、又新に移住せんとするものは宜しく同志を叫合して拓植團體を組成して始めて移住を爲すべきなり、若し夫れ大農小農其何れの方に依るかの如きに至つては余は斷じて大農法の彼地に適當にして、從つて多くの便利と利益を得べきを稱道すべしと雖も、苟も各自が其土地に依りて搦ぶ所に任じて可なり、是れ實に國家百年の大計なるのみならず、各自が享受すべき處の利益亦計り知るべからざるなり、

### ○漁業上改革論

抑も北海全土を圍繞する所の魚藻は果して幾許なるか、其數量到底測知するも能はざるなり、此地實に魚藻を以て其開闢の基を造爲す、其毎年時を期して群來する魚族、岩礁に繁茂する藻類の饒多なる眞に取りて之を盡す能はざるなり、其額年々全道物産の八九分を占む、故に北海道に於ける毎年魚藻の豊凶は内地米作の豊凶と一般、豊は以て全土の景氣を來し、凶は以て不景氣を來す、其範圍極めて廣漠、其形狀極めて洪大、一度此地に足を入るもの斯業の旺盛に眩目して他事を顧みざるもの亦故なきにわらず、從つて改革すべきもの多々存益す、其用也最所の漁船漁具なり、漁夫雇傭の方法の如き、及び獵採の事に至る迄大に改良を施すべきもの多しと雖ども、其範圍の極めて廣大なるが爲に、魚類の特なると、地方の異なるに依り其方法亦異にして實に千差万別、十指の能く擧げ竭くすべき所にわらず、從つて一々之を論ぜんか、其魚類と地方との異なる毎に之れか改革の途を示さざるべからず、斯くするときには非常の紙數と時日とを要し、特に各當事者の孜孜として之れが改良の途を講ずるものあるを以て余は暫らく之を論せずして止むべし、只少しく



注意を乞はんとする所のものは遠洋に於けるの漁業と人工解化の督勵之れなり、夫れ利の多き處、人之に集まる恰も蟻の甘きに付くが如く、其之を去るや甘味盡きて去るが如く、北海道に於ける魚鹽の業たる其利益實に言外、従つて各移住民の全部は皆此業に従事し、日進月歩殆んど其底止する所を知らず、爲に近年大に競争を生じ、其沿海に於ける各自が漁場の借區は密度益密にして、或る一部に至りては、正に左右觸れんとし、其濱岸に於ける干場の借區、亦亦一部を除きて既に全く空地なき迄に發達し來れり、競争益を甚だしくして利益漸く薄し、然れども未だ以て此等の人士をして他の農商其他の事業に移らしむる能はざるなり、是れ畢竟尙ほ未だ其利益の他業に比して、早く且つ多きに基因せずんばならず、此事たる別に攻撃を加ふべきの事にならず、然れども深く其内部に入りて考慮を凝らすときは、只徒らに目前少許の利益に眩惑して遠大の計を爲さざる、眞に慨息に堪へざるものあり、近海に於ける漁業盛大を極め、其競争頂天に達し、利益漸く薄きの今日に當り、只に競争者なきのみならず、其利益も亦従つて漠大なるの遠洋漁業に手を伸ばすものなきに至りては、余輩は些しく諸士の注意を乞はざるべからず、抑も遠洋漁業とは果して如何なる事をか呼稱する、洋上に於ける獸類の捕獲及び鱈魚等を以て其主眼とす、然れども此事亦凡る多少の資本を要し少資力者の爲す能はざるものなりと斷念して放棄すべきか、是れ又農業に於ける場合と一般、各漁業家か團結一致以て資力を形成して之に従事せんとせば、實に容易の事たり、見よ本年擇捉東海岸に於ける鱈漁は如何に多額の収得ありしか、建網一統に付平均千石、多きものは二千石に至り、而も之を盡す能はず、徒に彼は潮流の漂はす處となりて海岸砂礫平かなるの處に腐敗の山を築きしにあらざるや、豈に羨望の至りならずや、又見よ彼の赤髯狡奴が横まゝに我が版圖を侵し來りて、年々捕獲し去る所の高等なる海獸は其數實に幾万頭、其價格實に幾百万圓なるを知らざるにあらざるや、然るに我邦に於てこれに従事するもの唯一帝國水産株式會社あるのみ、而も微々として振はず、彼等獸族は空しく洋止に出沒して諸君の迂濶なるを嘲弄するにあらざるや、豈に浩嘆の至りならずや、若し漁業家諸士にして團結一致、奮進一番、其資力を合して以て之れに従事せんか、其利益眞に豫測すべからざるなり、乞ふ國を愛し又已れを愛するの精神を鼓舞して些の危険と困難とを恐るゝなく突進之れに従事せよ、是れ實に各自の利益として非常に増進せしむるのみならず、又大に國家を益するものたり、

只夫れ人工解化の事に至りては今皆政府の事業に屬す、然れども未だ以て見るに足るもの



甚だ罕れなり、然れども政府は孜々改良の途を講じ、年々多少の進歩をなすつゝあり、只望む所は各漁業者中の大漁民たるもの其資本の幾分を割へて政府と共に此業を奨励し一は以て各自自身の利益を圖り、一は以て全般同業者の利益を保護すべきなり、是れ甚だ細事たるが如しと雖も、亦決して忽諸に附すべからず、若し此業にして大に隆盛を極めんか、各自か投入せし資本も償いて充分餘裕あるの収得を見るのみならず、漁業家全体に及ぼすの利益亦決して尠少にあらざるなり、

北海道に於ける生産事業の上に要する改革、概ね此の如し、其他牧畜鑛山工業等の上に於けるも亦改革すべき要所少なからず、然れども是皆移住者に向つて直接の利害を及ぼさざるもののみならず、之に従事する處の當事者自身、分に應じ業に依り勉勵改良の策を講じつゝあるものあるを以て、此等は皆他日に譲り、余は論鋒一步を進めて是れより、全世界に對する北海道の位置を論せんと欲す、

海濱の阿たしゆ本三つん其成も文しはまゝなり

肅啓自分儀錦地漫遊中は不尠御懇待を忝ふし、特に各郡區長諸君よりは格別非常の御厚情を蒙り、何とも難有御蔭を以て充分なる調査を得實に欣喜の至り、歸宅早々御禮可申上管之處庶事に取紛れ、延引の段御宥恕被下度、前記北海道論半編不文を顧みず起草候儘机下に呈上仕候間御笑讀被下度、尙後半は近々中印行差上申度、何れ自分當地の同志を叫合して早晚錦地へ渡航仕り、目的の事業に着手仕度、其際は又々何分の御助力相願度先は御禮旁右申上度如斯に候

頓首

明治廿七年十一月 日 入村孝十郎 百拜

殿



工上3T-56

明治廿七年十一月十日印刷  
明治廿八年十二月十日發行

新潟縣中頸城郡小出雲村

著作兼發行者 入村孝十郎

同 直江津町

印刷者 深堀庫之助

同 同

印刷所 直江津活版所



1944  
1945  
1946  
1947  
1948  
1949  
1950  
1951  
1952  
1953  
1954  
1955  
1956  
1957  
1958  
1959  
1960  
1961  
1962  
1963  
1964  
1965  
1966  
1967  
1968  
1969  
1970  
1971  
1972  
1973  
1974  
1975  
1976  
1977  
1978  
1979  
1980  
1981  
1982  
1983  
1984  
1985  
1986  
1987  
1988  
1989  
1990  
1991  
1992  
1993  
1994  
1995  
1996  
1997  
1998  
1999  
2000  
2001  
2002  
2003  
2004  
2005  
2006  
2007  
2008  
2009  
2010  
2011  
2012  
2013  
2014  
2015  
2016  
2017  
2018  
2019  
2020  
2021  
2022  
2023  
2024  
2025



18  
566

北海道論

国立国会図書館

18  
566

023283-000-0

18-566

北海道論

入村 孝十郎 / 著

M28

ADC-0156

